二〇二四年度　自己推薦入試　入学試験問題

文学部　国語国文学科

小論文

注意事項

一. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
二. 試験開始の合図があったら、解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入してから問題にとりかかること。
三. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入すること。
四. 試験時間は、九時三〇から十時三〇分までである。
五. 試験終了後、答案を回収する。問題冊子と下書きは持ち帰ること。

白百合女子大学

［問］次の文章の内容を要約しなさい（三〇〇字以内）。また、傍線部「手放す」ということについて、あなた自身の経験を例に挙げて、自分の考えを述べなさい（五〇〇字以内）。

昨年、映画やドラマを早送りで見るスタイルが話題となった。もっと早く、もっと効率よく。そんな欲求に応えるように、ネット上には本の要約を読む手間すら惜しむような、ユーチューバーによるビジネス書の解説といった動画コンテンツがあふれる。

ライターのレジーさんは、事業戦略の立案に関わる会社員でもある。その経験から、要約などを利用して「自分に必要な知識をクイックに得ることは有効」と話す。

その一方、スピードと効率を求めるあまり、「一部の人びとの間で、ものごとを手っ取り早く理解し、うまく立ち回るツールとしての知識ばかりが求められている」と指摘する。そうした知識が「ファストフードのように摂取しやすく加工され、『教養』というラベルを貼られて出回っている」とも。

そんな風潮を、昨秋刊行された『ファスト教養　１０分で答えが欲しい人たち』で論じた。レジーさんは、「ファスト教養」が求められる背景について「自己責任が強調される社会で、限られた時間で自分の生産性を高めて成長しなければ、いまある地位すら保てない。人びとの間に、そんな不安がある」とみる。

時間に追われるように走り続けなければ、優劣の間に引かれる線の「向こう側」に転落してしまうという不安感――。

でも、立ち止まって考えてみたら、その「成長」はいったい何のためなのだろう。

福岡市の高齢者施設「宅老所よりあい」などの統括所長で、介護現場での思索をつづった『シンクロと自由』の著者、村瀬孝生さんはまだ経験の浅かった頃、認知症の人との理屈の通じないやりとりに打ちのめされ、介護の指南書を読みあさった。

本の内容を目の前のお年寄りに当てはめると、「相手のことをわかった気になり、『成長』も感じた」。それでも消えない違和感。やがて「相手をコントロールしようとしている自分」に気づいた。

そんな頃、「家に帰る」と言い張る認知症の女性がいた。制止しても振り切って外に出る。根負けして、ついて行くことにした。歩き疲れるまで付き合い、日が暮れる。それを繰り返すうち、外に飛び出さなくなり、やがてお互いに「折り合いがついた」実感があった。

「人は思い通りにならない。そう受け入れた時、（コントロールの対象ではない）その人自身に初めて出会えた」

なぜ当初は、ついて行きたくなかったのか。限られた時間で次々にこなす介助の計画が崩れるのを恐れていた。「時間は自分が所有し、思い通りにできる。そんな考えが、苦しさの根っこにあった」

村瀬さんが統括所長を務める施設ではいま、介助の計画は「手放す」ためにあるという。

「自分で自分を縛っている鎖を断ち切るには、本当の意味で他者に出会い、その手を借りるしかない」。立ち止まって得た実感だ。（上原佳久・真田香菜子「立ち止まる」による）

『朝日新聞』２０２３年１月９日
承諾番号：２４－０７４９
朝日新聞社に無断で転載することを禁じる